

名古屋大学 農学国際教育研究センター ニュース

令和1年6月1日発行 通巻35号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222

<https://icrea.agr.nagoya-u.ac.jp/>

e-mail:icrea@agr.nagoya-u.ac.jp

## 次世代の農資源利用研究 プロジェクトキックオフ シンポジウムを開催

科研費特設分野[次世代の農資源利用]「インターディシプリナリーアプローチによるサゴヤシの商品作物化」、「接木技術の高度化による多様性回復とモノカルチャーの共実現」のキックオフに当たり、標記シンポジウムを生命農学研究科、高等研究院、アジア共創教育研究機構と農国センターの主催（共同企画）、環境学研究科との共催により、2018年12月5日(水)に開催しました。国内8大学11人の研究者とインドネシア・北ルー県知事を話題提供者、コメンテーターとして迎え、関連した継続中の科研費海外学術研究、新学術領域の成果を紹介するとともに、農資源利用の多様性の確保、食料安全保障の強化等を通じて持続的な社会を創出するための展開について議論しました。

(江原 宏)



インドネシア会場と繋いでのディスカッションの様子

## ブルンジでイネ育種に関する 国際ワークショップをIRRIと共催

2018年12月3～5日、ブルンジの首都ブジュンブラにある国際稲研究所（IRRI）東南部アフリカ支所ブルンジ拠点において、「東南部アフリカ稲育種ネットワークのための国際ワークショップ」をIRRIと共催しました。2018年度に開始した日本学術振興会（JSPS）研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アフリカ稲作研究イノベーションのための研究拠点と国際協働ネットワークの構築」の一環として実施した本ワークショップには、名古屋大学、IRRI、国際トウモロコシ・コムギ改良センター（CIMMYT）およびアフリカ稲センター（Africa Rice Center）に加え、ケニア、タンザニア、ウガンダ、マラウイ、ザンジバル、モザンビーク、ザンビア、コンゴ民主共和国、エチオピア、ソマリア、およびブルンジのイネ研究者が参加し、合計15ヶ国、37名を数える国際色豊かなイベントとなりました。ワークショップ初日には、農学国際教育研究センターの榎原准教授および生命農学研究科の土井准教授が講演し、名古屋大学が開発した病害、冷害、塩害などに抵抗性を持つイネ系統をアフリカ各国の研究機関に配布し、それらの生育や収量を評価する計画について協議を行いました。2日目には、アフリカ各国の研究者から、イネ育種に関する現状、課題、展望などについて報告があり、研究協力、技術指導、人材育成の必要性が再認識されました。3日目には、アフリカ各国から参加した研究者に対してイネ育種技術およびイネ育成系統の圃場における評価方法に関する実地研修を行いました。本ワークショップを開催したことにより、東南部アフリカのイネ研究のためのネットワークが強化され、活動の方向性についても相互理解が進みました。今後、本ネットワークを活用し、名古屋大学が開発したイネ育成系統を各国に配布し、栽培試験および系統選抜を進めるプロジェクトを推進していく予定です。

(榎原大悟)



15ヶ国から集まった37名のワークショップ参加者

## センター長挨拶

江原 宏 アジア共創教育研究機構 教授(兼任)



この度、3代目のセンター長を拝命いたしました。農学の国際開発問題を実践的に解決する人造りを目指して18年間活動してきた農国センターは、昨年4月に山内前センター長の下で初めての改組を行いました。新たに、研究展開部門と実践地域開発部門を設置、両部門にそれぞれ2研究室を置き、また、国内外とのネットワーク形成と事業運営を担う国際連携室を設けています。そして本年は、新たな教員や研究員も迎え、いよいよ新体制が名実ともに整いました。この2部門・4研究室と国際連携室の機能を十二分に発揮し、環境に調和した農業生産と効果的資源利用を可能とする新資源・技術の開発、馴化、普及に関する研究と社会実装、並びにそれらを担う人材育成の取り組みを、より一層推進してまいります。引き続き、皆様からの温かいご理解とご支援を賜わりますよう、お願い申し上げます。

## 離任挨拶

山内 章 名古屋大学大学院生命農学研究科 教授



明治以来、欧米を目指して進めてきた科学研究をさらに発展させる中で、みずからの内発的な基礎科学としての研究課題を、途上国を含めた農業生産、消費、流通の現場において見出すことは農学にとって非常に重要です。

そのような現場には、解決すべき地球規模の課題や新たな学術的知見の創出が見込まれる研究シーズが多くあります。農国センターが、農学の学問分野を統合し、課題解決と研究成果の現場への適用を実現する「場」として機能し、社会実装を見据えたレベルの高い基礎研究をどんどん取り入れ、本来総合的学問である新たな農学の創造の場としてさらなる発展を続けることを期待したいと思います。

12年間の永きにわたり、ともに働いた教職員、学生、関係諸機関の皆さまに心よりお礼申し上げます。

## 着任挨拶

仲田 麻奈 熱帯生物資源研究室 助教



2019年4月1日より、熱帯生物資源研究室の助教に着任いたしました。これまでにイネ科作物の水ストレス適応性に関わる研究に取り組んできました。農国センターは、私がポストドク時代を過ごした場所であり、その他にもケニアでのSTREPSプロジェクトに参画したり、オープンセミナーに参加したりと交流を持ってきたからこそ、再び農国センターで研究に従事できることを光栄に思います。国際共同研究ならびにネットワーク構築と人材育成を通じた国際協力の発展に貢献できるよう、スタッフや学生の皆さんと協力して、勇往邁進してまいります。

**略歴** 1981年生まれ。2005年近畿大学農学部農学科卒業。2011年名古屋大学大学院生命農学研究科修了後、名古屋大学農学国際教育協力研究センター研究機関研究員、同センター日本学術振興会特別研究員RPDを経て、2015年より名古屋大学高等研究院YLC特任助教に採用。2019年4月より現職。

## 着任挨拶

### 高橋優希 研究員

2019年4月より農国センターの研究員として地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)「ベトナム、カンボジア、タイにおけるキャッサバの侵入病害虫対策に基づく持続的生産システムの開発と普及」に携わっております。農国センターという、このような実践的な研究の場に身を置かせていただけることに感謝申し上げます。これまでは、カンボジア稲作の経済変容に関する実証的研究に取り組んで参りました。今後は、研究経験と農国センターで学ぶ多くのことを活かし、プロジェクト活動の一助となれるよう、日々、努めていく所存です。



**略歴** 2009年に東京農業大学国際食料情報学部を卒業。2012年にカンボジア王立農業大学大学院留学を経て2014年に東京農業大学大学院農学研究科博士前期課程を修了。2019年3月に同大学院農学研究科にて博士号(国際バイオビジネス学)を取得後、2019年より現職。

### 田代 亨 研究員

2019年4月1日付けで客員研究員を拝命いたしました田代 亨です。今回このような機会を頂けることを嬉しく、光栄に思っております。私は、これまで、食用作物のイネ・コムギ、油糧作物のゴマなどを対象に、作物生産学的視点から収量・品質の高位・安定化を目指した研究を進めてきました。本センターでは、開発途上国の農業研究者・技術者の人材育成を視野に「東南アジアイネ品種の玄米品質に関する研究」を遂行いたします。スタッフの皆さんと協力しながら、本センターの更なる発展・活性化に向けて、微力ながら全力を尽くす所存であります。



**略歴** 1946年神奈川県生まれ。1969年東京教育大学農学部卒業。1974年名古屋大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学。1976年名古屋大学助手、1992年同助教授。1996年三重大学生物資源学部教授。2004年千葉大学園芸学部教授。2012年千葉大学グランドフェロー。

## 客員教授紹介

### ニオネス・ジョナサン・マニト フィリピン稲研究所 遺伝資源部門長 外国人客員教授(生物遺伝情報研究室) (任期:2019年2月1日~2019年3月30日)

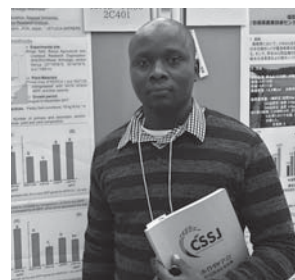
在任中は皆様との共同研究に励むと共に、ICREAオープンセミナーにて、「気候変動への対応を目指したイネの品種改良 ~フィリピンにおける遺伝資源の潜在能力を解き放つ~」と題する講演を行う機会に恵まれ、大変有意義な時間を過ごすことができました。現在、フィリピン稲研究所には1万6千を超える多様なイネのアクセッションラインが保存されています。今後これら効率的な利用を通じた皆様との国際共同研究の推進に向け、中心人物として貢献できるよう努力する所存です。引き続きのご支援をよろしく申し上げます。



**略歴** 1976年生まれ。1996年 南ミンダナオ大学農学部卒業、2004年 フィリピン大学農学部農学専攻修士課程を修了、2012年 名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程修了(博士(農学)取得)。2003年 フィリピン稲研究所研究専門員、2005年 同シニア研究専門員、2013年 同研究専門主任、2016年遺伝資源部門長。

## ケニアから共同研究者を招聘

2018年度から実施しているJSPS研究拠点形成事業(B.アジア・アフリカ学術基盤形成型)「アフリカ稲作研究イノベーションのための研究拠点と国際協働ネットワークの構築」における研究交流活動に参加するため、2019年3月22~30日にケニア農畜産業研究機構ムエア支所のダニエル・メンゲ研究員が来日しました。名古屋大学で博士(農学)を取得しているメンゲ研究員は、本センターでイネの品種改良と栽培技術改良に関する研究打ち合わせに参加した後、東京農工大学において水田から得たリモートセンシングデータの解析方法について研修を受けました。さらに、筑波大学で開催された日本作物学会第247回講演会に参加し、共同研究の成果を発表しました。今後もケニアとの共同研究のキーパーソンとして活躍することが期待されます。



日本作物学会第247回講演会でポスター発表を行ったメンゲ研究員

(榎原大悟)



## 第7回JICA-JISNASフォーラムを開催

平成30年12月14日(金) 午後1時30分より、市ヶ谷のJICA研究所にて、第7回JICA-JISNASフォーラム「産官学協働による農林水産分野途上国人材育成について～JICA開発大学院連携における農林水産分野の日本の開発経験とは～」が開催され、大学関係者、JICA職員のみならず、官公庁、民間企業等からも多くの方が参加されました。本フォーラムでは、JICA開発大学院連携参加大学の事例等を基に、途上国留学生に伝えるべき「農林水産分野における日本及びアジアの開発経験」に関する話題提供の後、JICAが策定中である農林水産分野における途上国人材育成計画における6つの優先プログラムの分野ごとに活発な議論が展開されました。(伊藤香純)

## SATREPS「キャッサバの侵入病害虫対策に基づく持続的 生産システムの普及と開発」進捗

2016年度に採択され、ベトナム・カンボジア・タイにて展開中である標記のJST/JICA地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)では、対象3カ国においてキャッサバ病害虫管理技術の開発と普及による持続的キャッサバ生産の確立を目指しています。プロジェクトで開発した健全種苗は、2018年度より官民両者での試行生産が行われており、一般的な農家への普及方法を検討する段階に至っています。そこで2018年12月に、ベトナムにおける民間ベースでの種苗生産と販売のメカニズムを検討するため、同国のノンラム大学のカウンターパートであるDr. Nguyen Chau Nienを九州大学・名古屋大学に招聘し、農協を主軸とした流通メカニズムの視察を通じてベトナムで実施可能な普及方法について検討を重ねました。(伊藤香純)

## 学術雑誌「農学国際協力」Vol.17のご案内

(<https://icrea.agr.nagoya-u.ac.jp/jpn/journal/backnumber.html>)

本号では、京都大学教授の縄田先生に「今後の食料生産と国際農業協力」と題した巻頭言をご執筆頂きました。原著論文、ワーキングペーパー、フィールドレポートでは、アフガニスタン、モザンビーク、ケニア、フィリピン、ベトナムでの実践的な研究成果を掲載しています。国際人材では「学生主体の国際フォーラム」や「国際協力人材の事例研究」を、また報告記事では「産官学協働による人材育成に関するフォーラム」等を紹介しています。是非ご一読を！

(編集幹事 犬飼義明)

## オープンセミナー(2018年6月～2019年5月)

回数	日時	テーマ	講師	所属
2018年度 第1回	2018年 9月3日	アフリカの食糧問題解決に向けたイネ研究国際展開～ケニアにおける研究拠点の形成と活用～	榎原 大悟/芦刈 基行 /榎原 均	農学国際教育研究センター/生物機能開発 利用研究センター/大学院生命農学研究科
2018年度 第2回	2018年 12月5日	次世代の農資源利用研究プロジェクト キックオフシンポジウム	江原 宏/野田口理孝 (オーガナイザー)	アジア共創教育研究機構、 農学国際教育研究センター/高等研究院
2018年度 第3回	2018年 12月12日	シミュレーションモデルとリモートセンシング による農業生産性評価	本間 香貴	東北大学大学院農学研究科
2018年度 第4回	2019年 3月12日	気候変動への対応を目指したイネの品種改良 ～フィリピンにおける遺伝資源の潜在能力を解放つ～	ジョナサン・マニト・ ニオネス	フィリピン稲研究所 遺伝資源部門